

2007年6月20日

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 在間 進



学位申請者 伊藤（時田）伊津子

論文名 無生物3格二重目的語構文

—「生物3格」を含む二重目的語構文と対比しつつ—

（本体336頁，資料集73頁）

結論

伊藤（時田）伊津子氏から提出された博士学位請求論文『無生物3格二重目的語構文—「生物3格」を含む二重目的語構文と対比しつつ—』について，論文審査と口述による最終試験の結果，審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

論文の概要

言語表現は，人間の，現実界の出来事に対する関心の持ち方の反映である。そして，関心の持ち方は，対象が人間なのか事物なのかによって異なる。従来からも，表現対象が人間なのか事物なのかという，すなわち「有生性」の問題は，様々な観点から研究されてきた。

本研究の分析対象は，事物を表す与格（以下「無生物3格」）を含むドイツ語の二重目的語構文（以下「無生物3格二重目的語構文」と呼ぶ）である。研究目的は，これまでの，生物を表す与格（以下「生物3格」と呼ぶ）を含む二重目的語構文に関する研究成果と対比させつつ，「無生物3格二重目的語構文」の持つ形態的・情動的・統語的特性を，コーパス分析の一つの方法論的モデルとして，主に使用頻度の観点から調査・分析し，その分析結果を示すとともに，これらの諸特性が動詞の意味タイプ，より詳しく言えば，文意味タイプに基づくことを示すことである。

本研究が「無生物3格」という点に焦点を合わせて，二重目的語構文を調査・分析するのは，「有生性」という意味特性が二重目的語構文の特性とある種の関連性を持つと指摘されながらも，従来の研究は「生物3格」の事例を主な対象とし，「無生物3格」は例外として扱われるに過ぎなかったため，あるいは「生物3格」と「無生物3格」の事例を明確に区別しないまま行われてきたためである。

本論文における各章の概略は，以下の通りである。

第1章は、研究対象、研究目的、方法論、そして最後に本論文の構成について述べる。特に、方法論について、以下の3つのポイントが挙げられる。

- (1) 従来の研究では、いくつかの典型的な動詞が取り上げられ、理論的な分析・考察が行われてきたのに対して、「無生物3格二重目的語構文」を形成する動詞を、可能な範囲ですべて収集し、調査・分析の対象にする。
- (2) 従来の研究では、問題になる動詞の、いくつかの典型的な事例が取り上げられ、理論的な分析・考察が行われてきたのに対して、コーパスを用いて、分析対象とする動詞の「無生物3格二重目的語構文」の言語使用データを可能な限り幅広く収集し、具体的かつ個別的に調査・分析する。
- (3) 従来の研究では、多く、典型的な事例から帰納的に何らかの抽象構造を抽出する方法がとられてきたのに対して、二重目的語構文の形態的、統語的、情報構造的現象について、コーパスを用いて、使用実態、特に使用頻度を調査・分析する。

このような方法論の背景には、言語研究にとって、言語現象の背後にある抽象構造の抽出ももちろん重要であるが、言語使用の実態そのものを正確かつ幅広く把握することも、それに劣らず重要な一つの課題であるとの考えがある。これは、言語が、人間のコミュニケーション手段として使用されることにその存在意義を持つとするならば、当然のことであろう。

第2章は、二重目的語構文に関する先行研究の成果、知見などをまとめた結果を示す。具体的には、第2節で、「有生性」に関する研究を、第3節で、3格と4格の「人称代名詞化(人称代名詞が用いられるか否か)」、「定性(指示物が特定されるものか否か)」に関する研究を、第4節で、3格と4格の「中域語順(「3格-4格」語順か「4格-3格」語順か)」に関する研究を、第5節で、3格と4格の動詞との「構造的関係(3格と4格のどちらが構造的に動詞に近い)」に関する研究を取り上げる。

結論的には、3格の用法および二重目的語構文に関して、様々な研究成果がもたらされているが、「無生物3格二重目的語構文」については、今なお分析が不十分であり、ドイツ語の二重目的語構文の全体像を明らかにするためには、特に「無生物3格二重目的語構文」のさらなる実証的分析が不可欠であるということを述べる。

第3章は、実際のテキストやコーパスにおける二重目的語構文での「無生物3格」の使用頻度を調査した結果を示す。この調査の目的は、二重目的語構文における「無生物3格」が、実際はどの程度の割合で用いられているのか、また単なる例外的な用法なのかに関して、一定の結論を出すためのものである。

結論的には、二重目的語構文における「無生物3格」の使用頻度はコーパスの種類によって異なるが、会話文などの多く現れるテキストにおいても約1割、会話文などのあまり現れないコーパスでは約5割に及ぶなど、二重目的語構文における「無生物3格」の使用

頻度が決して例外的な用法として無視できるものではないことが述べられる。

第4章は、「無生物3格二重目的語構文」に関する事例をコーパスから収集し、調査・分析した結果を示す。第1節でコーパスを用いる意義について簡単にまとめた後、第2節では、「無生物3格二重目的語構文」の事例をどのように収集するかについて、第3節では、これらの事例を、どのような視点から調査・分析するかが述べられる。主なポイントは、(A)「人称代名詞化」、(B)「定性」、(C)「中域語順」、および(C)との関連で、(D)「文頭化」および「関係代名詞化」、(E)動詞との「構造的関係」の5つである。第4節では、前節で述べた調査・分析の視点に基づいて行った結果を、動詞ごとに、また、一部インフォーマントテストの結果も示される。

そして、最後の第5節では、「人称代名詞化」、「定性」、「中域語順」におけるそれぞれの使用頻度を、動詞をとおして眺め、これらの特性と、動詞の意味タイプ（正確に言うならば、それらの動詞を含む文が表す意味タイプ）との関係を分析・考察した結果を、すなわち「無生物3格二重目的語構文」を形成する動詞は、

- － 3格の対象に4格の対象をその一部として「追加」という「追加関係」
- － 3格の対象に4格の対象を「対比」という「対比関係」
- － 4格の対象を3格の対象に「所属」とい「所属関係」
- － 4格の対象を3格の対象の「支配下」に置くという「支配下関係」

の4つの意味タイプに分けられることが述べられる。

なお、動詞（ないしは文）の意味タイプにおける「人称代名詞化」、「定性」、「中域語順」の調査・分析結果は、以下のように、まとめられている。

(1) 「追加関係」動詞 (abgewinnen, anfügen, beifügen, beimengen, beimessen, beimischen)

- ① 3格も4格も、人称代名詞ではなく、名詞によって表される頻度が高い。
- ② 3格の場合、定の要素の頻度が、4格の場合、不定の要素頻度が高い。
- ③ 基本語順は、「3格－4格」語順である。

(2) 「対比関係」動詞 (gegenüberstellen, voranstellen, entgegensetzen)

- ① 3格も4格も、人称代名詞ではなく、名詞によって表される頻度が高い。
- ② 3格の場合、定の要素の頻度が高く、4格の場合、定の要素、不定の要素の頻度はほぼ半数ずつである。
- ③ 基本語順は、「追加関係」の場合に次ぐ「3格－4格」語順である。

(3) 「所属関係」動詞 (angliedern, zuordnen, zurechnen)

- ① 3格も4格も人称代名詞ではなく、名詞である頻度が高い。
- ② 3格も4格も定の要素の頻度が高い。
- ③ 基本語順は、「支配下関係」の場合に次ぐ「4格－3格」語順である。

(4) 「支配下関係」動詞 (ausliefern, aussetzen, entringen, überlassen, unterwerfen, unterziehen, verschließen, verschreiben)

- ① 3格も4格も人称代名詞ではなく、名詞である頻度が高い。
- ② 3格も4格も定の要素の頻度が高いが、特に4格における再帰代名詞の頻度が高い。
- ③ 基本語順は、「4格－3格」語順である。

第5章は、今後の研究の展望である。本研究での「無生物3格二重目的語構文」の調査・分析をまとめた後、本研究での方法論的特徴を述べ、最後に、二重目的語構文の全体像を明らかにするという目的のために残された今後の具体的な研究課題、具体的には、生物3格と無生物3格が競合する二重目的語構文および生物3格のみが現れる二重目的語構文の、本研究での方法論を用いた分析について述べる。

審査の概要及び評価

本論文は、上述したように、ドイツ語の「無生物3格二重目的語構文」を取り上げ、これらの事例が決して例外的な現象ではないことを実証的に示した上で、コーパスから幅広く収集した事例をもとに、形態的・統語的・意味的観点などの観点からドイツ語の「無生物3格二重目的語構文」を実証的に分析・考察したものである。分析過程での細かな問題点以外に、事例収集対象の確定、採用された頻度調査という方法論の限界など、解決しなければならない本質的問題点もいくつか含んではいるが、先行研究の成果を正確に押さえた上で問題提起をし、また、コーパス分析に関する問題点を十分に検討した上での事例分析を行い、それに基づき、一步一步着実に論を展開していく緻密な論文になっている。

本論文において、特に高く評価できる点を挙げると、以下の2点になるであろう。

- －コーパスによる頻度分析により、文頭化と中域の語順との相関性、これらの統語現象と3格目的語の情報特性との関係、さらには文意味タイプとの関係までもが解明された。これは、(a)当該二重目的語構文が複数の言語レベルの接点に生じる多面的言語現象であることを示すものであり、高い言語学的意義を持つ。(b)同時に、本論文の研究方法が、言語現象の多面的性質を浮き彫りにする方法論的基盤となりうることをも示している。
- －申請者によって提起された問題：なぜ「無生物3格」の場合、3格が人称代名詞で実現される頻度が低いのか」は、二重目的語構文全般の本質に深く切り込む問題提起である。これに対して申請者が提示した「認知的負担の大小」を軸とした簡明な認知的原理は正鵠を得た指摘であり、申請者の優れた洞察力の証左と言えるものであり、今後の研究の展開が期待できる。

もちろん本論文にも改善すべき点があくつも残されている。最終試験において、審査委員から様々な質問、コメントなどが出された。それらのうち、最も重要な点を挙げるとすると、以下のようなだろう。

- －「人称代名詞化」、 「定性」 および 「関係文」 の持つ 「情動的」 特性の分析に少し粗

さが認められ、またテーマ化、トピック化の概念規定なども必ずしも明確でない部分がある。情報的特性に関する理論的基盤をまとめ直すことが必要である。

—二重目的語構文の特性を全体的に解明するためには、分析対象として動詞の量を増やすだけでなく、情報構造の形成という観点から見れば、主語をも分析対象にすることが不可欠であろう。

—取り扱われている動詞はすべて複合動詞であるが、「無生物3格二重目的語構文」と複合動詞化との関連も明らかにすべきであろう。

—言語資料を分析するに際し、テキストのジャンル、文体、談話引用部かどうかなどに関して、もっと明確な記述がなされるべきであろう。

最終試験におけるこのような質問、コメントに対しても、申請者の応答は、すべてにおいてきわめて的確なものであり、指摘された問題点を申請者が十分に自覚していることを確認することができた。

審査委員会は、最終試験（公開審査）の結果も踏まえ、慎重な審議を行った結果、上記のように、申請者 伊藤（時田）伊津子氏の博士学位請求論文が、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。